

もと ち ばる
本地原 遺跡

都市計画街路事業八幡通線道路改良工
事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1994

宮崎県教育委員会

もと ち ばる
本地原遺跡

都市計画街路事業八幡通線道路改良工
事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1994

宮崎県教育委員会

序

宮崎県教育委員会では、国民共有の貴重な財産である文化財の保護のために種々の協議・調整を行っております。このたび、宮崎県小林土木事務所の依頼を受け、えびの市の八幡通線の改良工事に伴い本地原遺跡の発掘調査を行いました。本書はその発掘調査報告書です。

この調査では、室内に間仕切り壁のある弥生時代の竪穴住居跡が確認されました。この種の住居跡の報告例としてはえびの市では2例目で、しかも比較的初期の段階の住居跡の確認例となりました。これは、今後この形態の住居跡の九州内陸部での受容・伝播等を解明するうえで貴重な発見であります。

本書が学術資料としてだけではなく、社会教育や学校教育の場においても広く活用され、文化財の保護に対する認識と理解の一助となることを期待します。

なお、調査にあたって御協力いただいた関係諸機関をはじめ、御指導御助言をいただいた先生方、並びに地元の方々に心から感謝の意を表します。

平成6年3月

宮崎県教育委員会

教育長 高山 義孝

例　　言

1. 本書は、都市計画街路事業の八幡通線（原田・杉水流線）道路改良工事に伴い宮崎県教育委員会が実施した本地原遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、平成4年8月31日から10月16日まで実施した。
3. 本書に使用した遺構実測図は、菅付のほか福満悦子・原口キミ子・鳥集美代子が作成した。
4. 遺物・図面の整理は県総合博物館埋蔵文化財センターで行った。また、遺物の実測・拓本・計測等については整理補助員の協力を得て菅付がこれを修正し製図した。
5. 本書で使用した写真のうち空中からの全景写真及び遺構写真は業者に委託し、そのほかの写真については菅付が撮影した。
6. 本書では方位は磁北を採用し、土器の色調については「新版 標準土色帖」に準拠した。また、使用した記号は、M. N. が磁北、S Aが堅穴住居跡を表す。
7. 本書の執筆は、第I章3を山田洋一郎が、その他を菅付和樹が担当し、編集は菅付が行った。
8. 遺物は埋蔵文化財センターで保管している。

本文目次

第Ⅰ章 はじめに	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の組織	1
3. 遺跡の位置と歴史的環境	3
第Ⅱ章 調査区の設定と概要	4
第Ⅲ章 調査の記録	7
1. 遺跡の層序	7
2. 弥生時代の遺構と遺物	7
(1) 遺構	7
(2) 遺物	8
3. 繩文時代の遺物	14
第Ⅳ章 おわりに	15

挿図目次

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡分布図	2
第2図 本地原遺跡周辺地形図	5～6
第3図 土層断面図	7
第4図 S A 1 遺構実測図	9～10
第5図 S A 1 出土土器実測図	11
第6図 S A 1 出土石鏸・未製品実測図	12
第7図 包含層出土土器実測図	13
第8図 石器実測図	15
第9図 繩文時代遺物実測図	15

表 目 次

弥生土器観察表	16
石器計測表	18

第Ⅰ章 はじめに

1. 調査に至る経緯

本地原遺跡は、「原田・上江遺跡群」として周知された遺跡群にあり、平成2年9月に県文化課が行った平成3年度の事業照会に基づき分布調査をした結果確認された遺跡である。この本地原遺跡を通る八幡通線（原田・杉水流線）は遺跡の付近で道路拡幅工事が中断していたが、平成4～5年度にかけて拡幅工事が行われることとなり平成3年5月より小林土木事務所と協議を始めた。その間、同年8月に路線予定地の試掘調査を実施し、一部現道部分を含む道路東側に遺跡の存在を確認した。これを受け協議した結果、事業施工上路線計画の変更が困難なことからやむを得ずこの約1,500m²を調査対象地として記録保存のための発掘調査を実施することになった。調査は、平成4年8月の「埋蔵文化財発掘の通知」及び「発掘調査依頼」を受けて県教育委員会が調査主体となり同年8月31日から10月16日までの間実施した。

2. 調査の組織

本地原遺跡の発掘調査の組織は、次のとおりである。

調査依頼者	宮崎県小林土木事務所	
調査主体	宮崎県教育委員会	
	教 育 長	高山義孝
	教育次長	安田天祥
		宮路幸雄
	文化課長	甲斐教雄
	課長補佐	串間安匱
	庶務係長	税田輝彦
	埋蔵文化財係長	岩永哲夫
調査担当者	埋蔵文化財係	菅付和樹
		山田洋一郎
		面高哲郎
		飯田博之
事務担当者	庶務係	巻 庄次郎
	埋蔵文化財係	面高哲郎
調査協力	えびの市教育委員会	



1.本地原遺跡 2.遠目塚地下式横穴群 3.杉水流地下式横穴群 4.大迫原遺跡群 5.建山地下式横穴群 6.六部市遺跡
7.中溝遺跡 8.飯野城跡 9.法光寺遺跡 10.法光寺跡 11.芋畠地下式横穴群 12.小木原地下式横穴群 13.村ノ前遺跡
14.永田原遺跡 15.口ノ坪遺跡 16.木崎原古戦場跡 17.八幡丘遺跡 18.遺跡名不詳(小林市) 19.藏元遺跡

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡分布図 (1/50,000)

3. 遺跡の位置と歴史的環境

えびの市は宮崎県の西南端に位置し、九州山脈と霧島連山に囲まれた狭長な盆地である。この加久藤盆地は、段丘面には火山灰が堆積しており水田耕作には適さないために肥沃な氾濫原が弥生時代以降の生活拠点となったものと考えられる。山麓からは鉄山川・池島川・白鳥川・長江川など大小20の河川が川内川に合流し、盆地中央を西へ流れている。

本地原遺跡は周知の「原田・上江遺跡群」内の東端に位置している。原田・上江遺跡群は、加久藤盆地を西流する川内川とその支流池島川に挟まれた長三角形の低位段丘上にあり、二河川が合流するまでの区間、東西約5kmにわたる広大な埋蔵文化財包蔵地である。

次に、遺跡周辺の各時代ごとの概要を述べる。

旧石器時代

正式な調査は行われていないが八幡丘遺跡では、ナイフ型石器が採集されている。

縄文時代

早期の遺跡として押型文土器の出土している小木原遺跡群久見迫B地区などがある。このほかには村ノ前遺跡・大迫原遺跡群などで石皿が、村ノ前遺跡で石錘が採集されている。剥片石器の原石は、鹿児島市三船産・大口市日東産・人吉市桑ノ木津留産の黒曜石等が多い。

弥生時代

弥生時代の遺跡としては、小木原遺跡群久見迫B地区で中期の甕形土器や免田式土器が出土している。また、本遺跡では「花弁状を呈した間仕切り壁のある住居跡」が1軒検出されているが永田原遺跡でも同様の住居跡1軒を検出している。生産に関連するものとして石庖丁が、小木原遺跡群蕨地区・法光寺跡・苧畠遺跡で出土しているが、この本地原遺跡の中でも民家の庭から半月形石庖丁が出土したと言う。

古墳時代

当遺跡群のほぼ中央部に古墳時代の墓域として建山地下式横穴群がある。ほかに小木原地下式横穴群・苧畠地下式横穴群・杉水流地下式横穴群・遠目塚地下式横穴群があり、その地域の地下式横穴の平面プランは、平入り長方形ないし橢円形を呈している。小木原地下式横穴群のうち馬頭・久見迫B地区では羨門部閉塞で小木原地区と苧畠地区では竪坑上部閉塞と共に存している。これらは洪積世の砂礫段丘上に立地している。築造年代は、6世紀に集中し7世紀に降るものはない。

歴史時代

遺跡群の西部北寄り、標高約260mの位置に蔵元・法光寺・中満の三遺跡がある。この三遺跡は平成4年度にえびの市教委によって調査されている。蔵元遺跡では、検出された遺構として竪穴状遺構1基・掘立柱建物跡1棟・溝状遺構13条・土壙15基・石組遺構1基がある。法光寺遺跡では、遺構として掘立柱建物跡15棟を数え、溝状遺構2条のうち2号は幅4mの大型のものである。竪穴状遺構も1基ある。遺物として墨書き土器や布目瓦など

は注目される。中満遺跡では多くの柱穴群と溝状遺構・円形土壙等が検出されている。原田・上江遺跡群の北西端に永田原遺跡があり前述の弥生の住居跡のほか掘立柱建物跡9棟・溝状遺構17条などが検出されており、出土遺物として土師器・須恵器・布痕土器・土師質土器・陶磁器・紡錘車・土錘などがある。原田・上江遺跡群の西端に小木原遺跡群蕨地区がある。歴史時代の遺構として掘立柱建物跡7棟と竪穴状遺構2基・溝状遺構1条があり、遺物として土師器・陶磁器・砥石・石鍋などが出土している。

古代の遺跡としては、法光寺跡・永田原遺跡・口ノ坪遺跡（掘立柱建物跡）などが知られている。また、原田・上江遺跡の北部に中世の山城飯野城跡がある。西部には、島津氏と伊東氏が戦い伊東氏が大敗をきっすることになった木崎原古戦場跡がある。近世の遺跡では、六部市遺跡があり近世の竪穴遺構や中・近世の陶磁器類等が出土している。このように本遺跡周辺は旧石器時代から連綿と生活の痕跡が認められるのである。

《参考文献》

- 「原田・上江遺跡群 蔵元・法光寺・中満遺跡」『えびの市埋蔵文化財調査報告書 第12集』えびの市教育委員会 1993
「広畠遺跡」『えびの市埋蔵文化財調査報告書 第7集』 えびの市教育委員会 1991
「永田原遺跡・小木原遺跡群蕨地区・口ノ坪遺跡」『えびの市埋蔵文化財調査報告書 第6集』えびの市教育委員会 1990
「えびの市遺跡詳細分布調査報告書」『えびの市埋蔵文化財調査報告書 第1集』えびの市教育委員会 1985

第Ⅱ章 調査区の設定と概要（第2図）

調査区は、試掘により路線予定部分の東半部となつたため、民家への入り口や生活道路を除いた5箇所を南から便宜的にI～V区として10mの基準坑を設置した後、調査を始めた。調査の結果、遺物の包含はIV区南側とV区のII～III層で確認された。遺構は、II区でV層のアカホヤ火山灰層上面で数基のピットを検出したほかは、IV区南側でIV層上面で弥生時代中期末～後期初頭頃の土器が出土した間仕切り壁を有する花弁状の竪穴住居跡が検出されたのみである。この竪穴住居跡は、7個の突出壁を有し主柱穴は4本であったが、西側の2本は建て替えの痕跡を残していた。また、床面付近からは磨製石鏸やその未製品が出土している。



第2図 本地原遺跡周辺地形図

第Ⅲ章 調査の記録

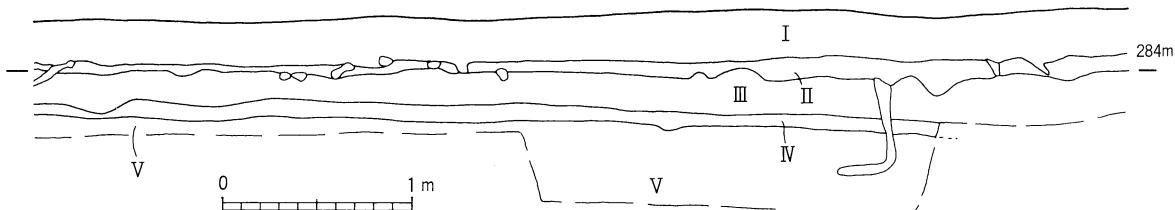
1. 遺跡の層序

えびの地方では鍵層となるアカホヤ火山灰層の上はほぼ黒色の土であり、本地原遺跡においても同様の状況が観察できる。層序はIV区の東壁の一部を図化した（第3図）。調査地はほぼ平坦な地形であるが、調査区の北側と道路から西側は一段低くなっている。第I層は20数cmの厚さがあり、黒色土が耕土化されたやや灰色味がかった黒褐色土層である。II・III層は一応分層したが土層断面でのみ漸くわかるかどうかという微妙な違いの黒色土層で、平面的には殆ど見分けがつかない。20~30cmの厚さがある。IV層はIII層が少しずつ褐色味を帯びてくる層でV層のアカホヤ層へと続く。20cm弱の厚さである。IV区で検出した竪穴住居跡はこの層の上面で確認できたが、平面では確認できる壁際が、埋土を掘る際にはなかなか検出しにくいなど土質も土色もごく近いものである。次のアカホヤ層は一転して砂質の強い層となる。

2. 弥生時代の遺構と遺物

（1）遺構

弥生時代の遺構としては、IV区で竪穴住居跡が1軒検出された（SA1 第4図）。このIV区南半部でII~III層にかけて比較的遺物の集中した箇所のIV層上面で漸く確認できたものである。検出時から突出壁が出ており遺物も上層に集中していたことから、掘り込み面はIII層付近であったと考えられる。道路拡幅部分では約4分の1の検出であったため、当初の予定どおり道路を迂回させて現道部分の調査も行った。この道路下は旧道の轍跡の攪乱が著しく、しかも中央を水道管埋設坑がかなり深く掘削していた。検出後の埋土内からは磨製石鏃やその未製品・チップ・剥片などが土器小片に混じって出土した。また、床面付近からも磨製石鏃や未製品が出土している。検出された竪穴住居跡は7箇所の突出壁を有し、それぞれの突出壁で間仕切られた部分はベッド状遺構が削り出されている。この



- I 黒褐色土。ややきめが粗い砂質。現耕作土。ガラス質の白っぽく光る鉱物粒が混じる。
II 黒色土。やや粘性のある砂質土。削るときめ細かな感触である。柔らかい。
III 黒色土（IIとほぼ同色）。やや粘性のある砂質土。若干固めで削るとバラバラと剝がれる感触である。
IV 暗褐色土。やや強い粘性のある砂質土。削ると少し固め。V層への漸移層。
V 暗黄褐色土。アカホヤ火山灰層。砂質土。40数cmの厚さがある。
そのほかに、木痕跡と思われる小攪乱が多く見られる。

第3図 土層断面図 (1/40)

ベッド状遺構は検出面が低かったせいもあって壁の高さがおよそ15cm前後である。また、ベッド状遺構の立ち上がりは西側が2~10cmと低いのに比してそのほかは15~20cmである。平面プランは、南~東~北西側にかけて円形を基調とした花弁状、西~南西側は隅丸方形形状を呈しており、突出壁を除いた床面積は約49m²を測る。また、ベッド状遺構部分を含めた径は南北で8.7m、東西で8.1m、検出面からの深さは中央で約55cmである。住居跡の埋土は殆ど黒色砂質土で、床面上部にアカホヤのブロックが混じるものか黒色土 자체は分層し難い。アカホヤブロックの堆積状況からは住居跡埋土は自然堆積によるものと考えられる。中央部床面はアカホヤ層まで掘り込まれて、外壁面及びベッド状遺構の内側には壁帶溝やピットの類いは検出できなかった。主柱穴は4本。中央やや南寄りには長径約1.6mの不定形の掘り込み（以下、中央土坑という）があり、その中央に径25cm、深さ約35cmの小ピットが、その東西にそれぞれ約45cmと29cmの小ピットが検出されている。中央土坑及び小ピットの埋土は同じく黒色砂質土である。中央土坑の南北に磨製石鎌と同じ石材のチップが多く見られ、北西側に炭化材片が多く見られた。しかし、周囲を含め焼土や灰は検出されていない。主柱穴には、検出時中央部に柔らかい黒色のパサパサした砂質土が見られ、これは柱の腐食した痕跡と考えられた（図中網掛け部分）。この穴の径は18~21cmでやや先細りとなっている。柱穴のうちP2・P3は検出面での径が50cm弱、深さがP2は約90cm、P3は約80cmである。また、P1とP4は柱穴を完掘した際にさらに東側に柱穴が検出され、建て替えが行われたことが確認できた。この柱穴は黒色土とアカホヤとアカホヤの下層の硬質褐色砂質土との混合土で完全に埋め戻されて硬く締まっており、P1~P4のすべての柱痕のまわりと中央部床面西側の貼り床部分に同じ混合土が使用されていた。P1の径は約40cm、深さは約92cm、その東側の柱穴の径は40cm弱、深さが約81cmである。P4とその東側の柱穴の径は約40cm、深さはP4が約94cm、東側の柱穴が約89cmである。この建て替えに伴い一部住居を拡張したと思われる痕跡が西側のベッド状遺構に以前の外壁の一部かと考えられる段（6~10cm）として残り、また、同南西側には削り残された突出壁の一部とも思われる自然層の削り残し（高さ約6cm）が見られる。

（2）遺物

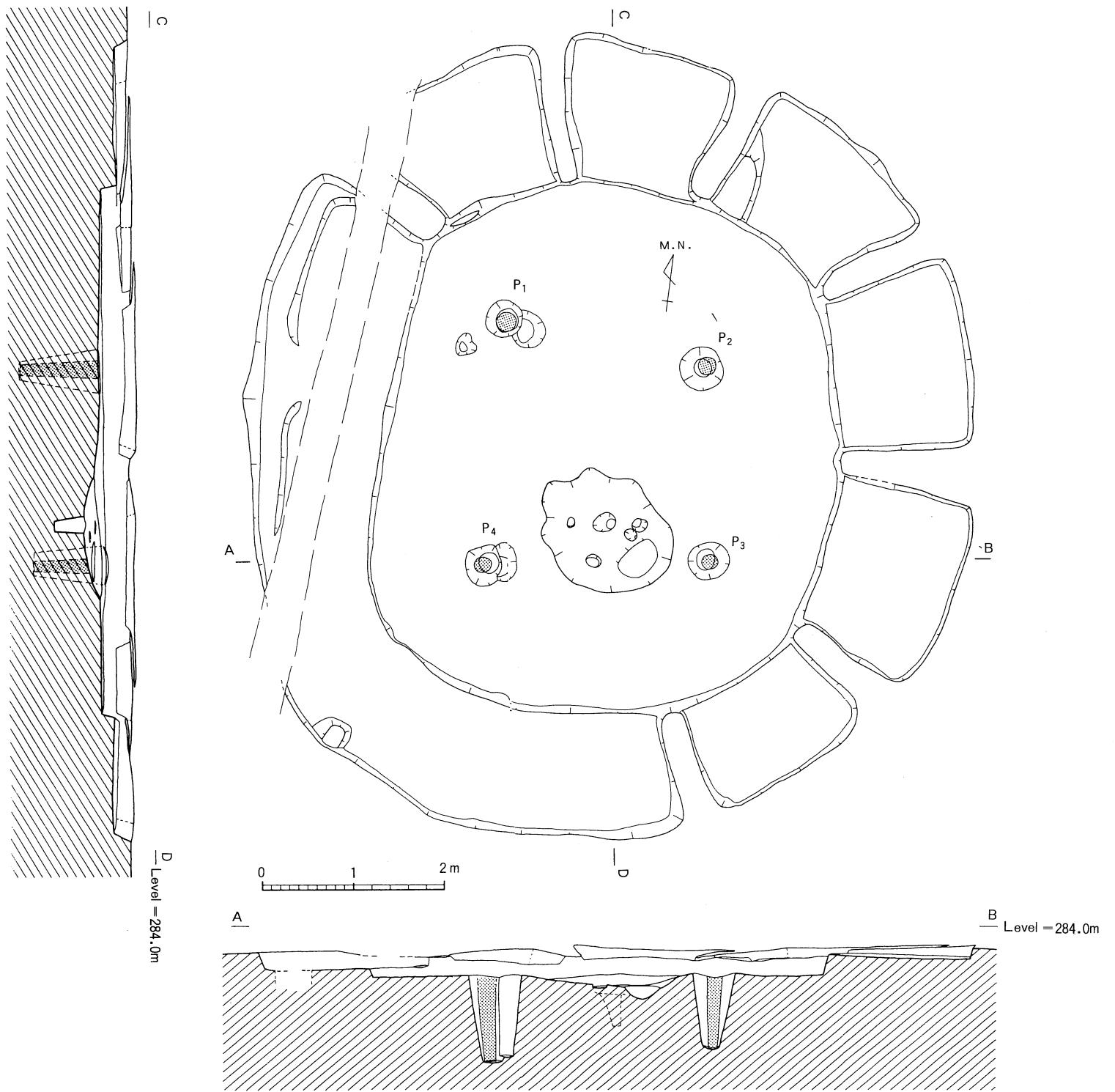
土器（第5・7図）は全体に出土点数が少ないので一括して分類する。住居跡からは上層から下層まで全体的に出土しているが殆ど破片である。また、周囲の包含層出土の土器も殆ど破片である。

甕形土器口縁部

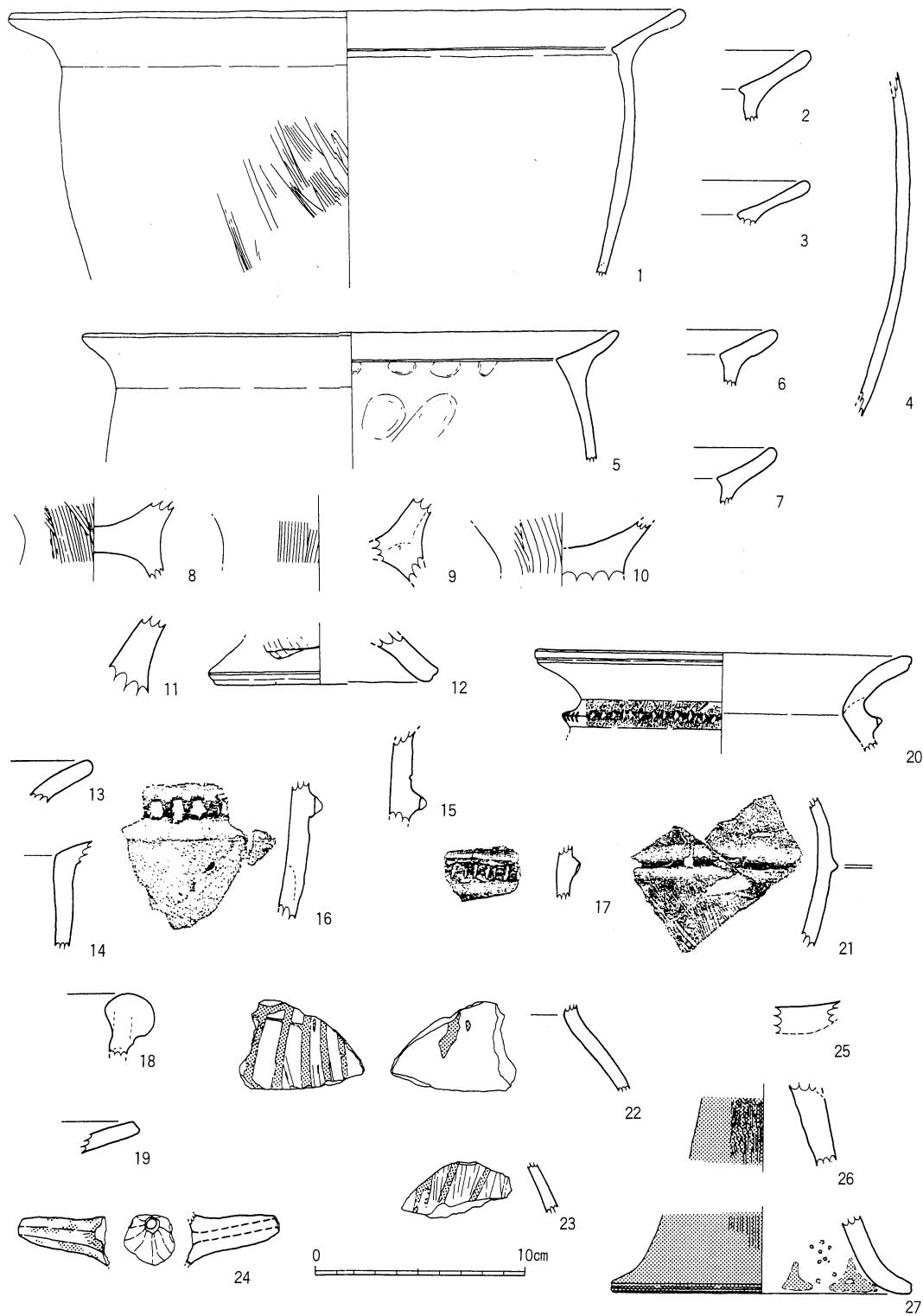
A類（38）…小破片でわかりにくいが口縁上部が平坦かつ水平で短いもの。2条の短沈線が見られる。

B類（35~36）…口縁部が厚く短めであまり傾かず内側への張り出しも殆どないもの。口縁端部は丸い。37もこの類と思われる。

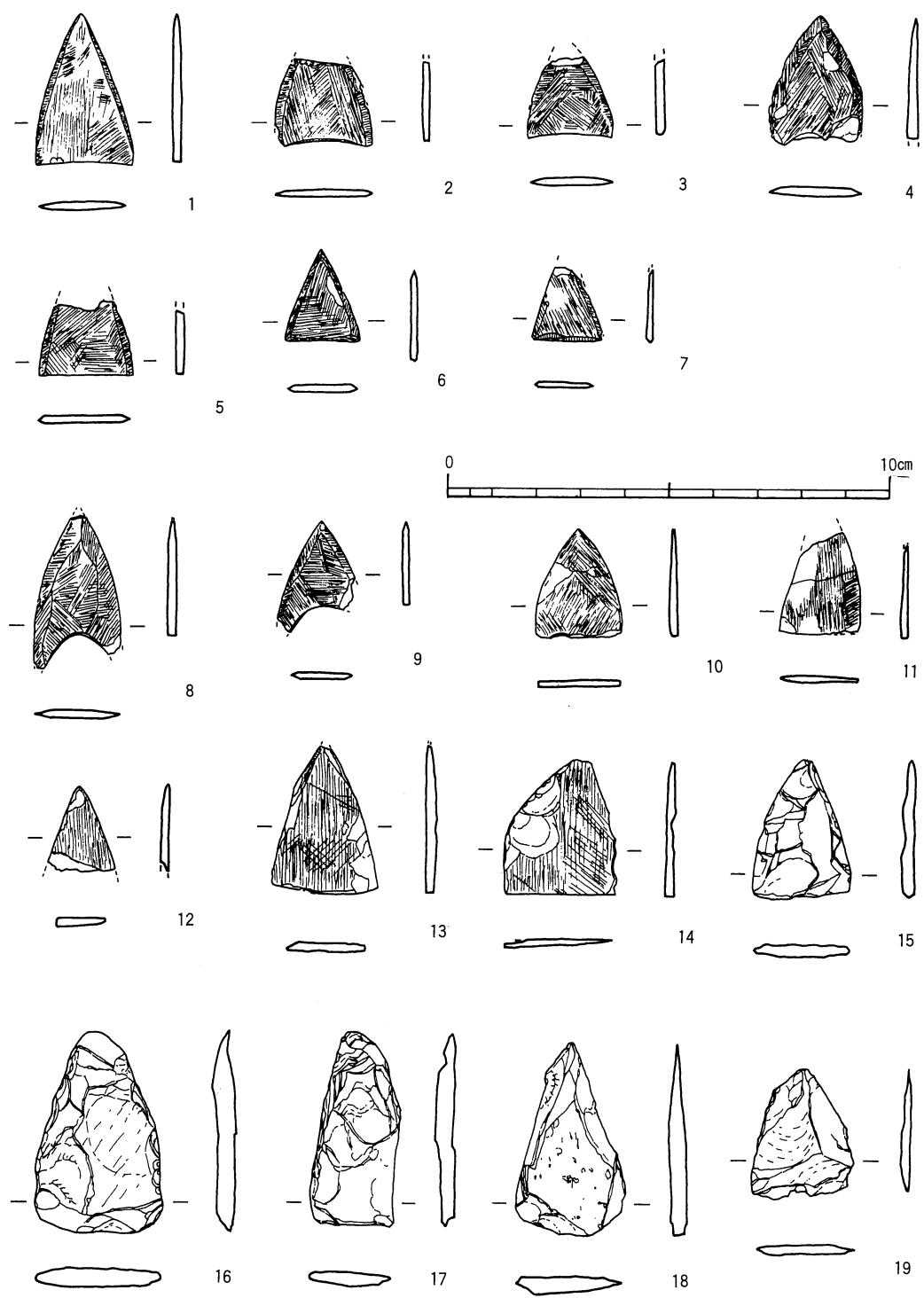
C類…口縁部がやや長めに伸び端部は丸い。傾きは顕著で口縁部上面が若干くぼむもの。



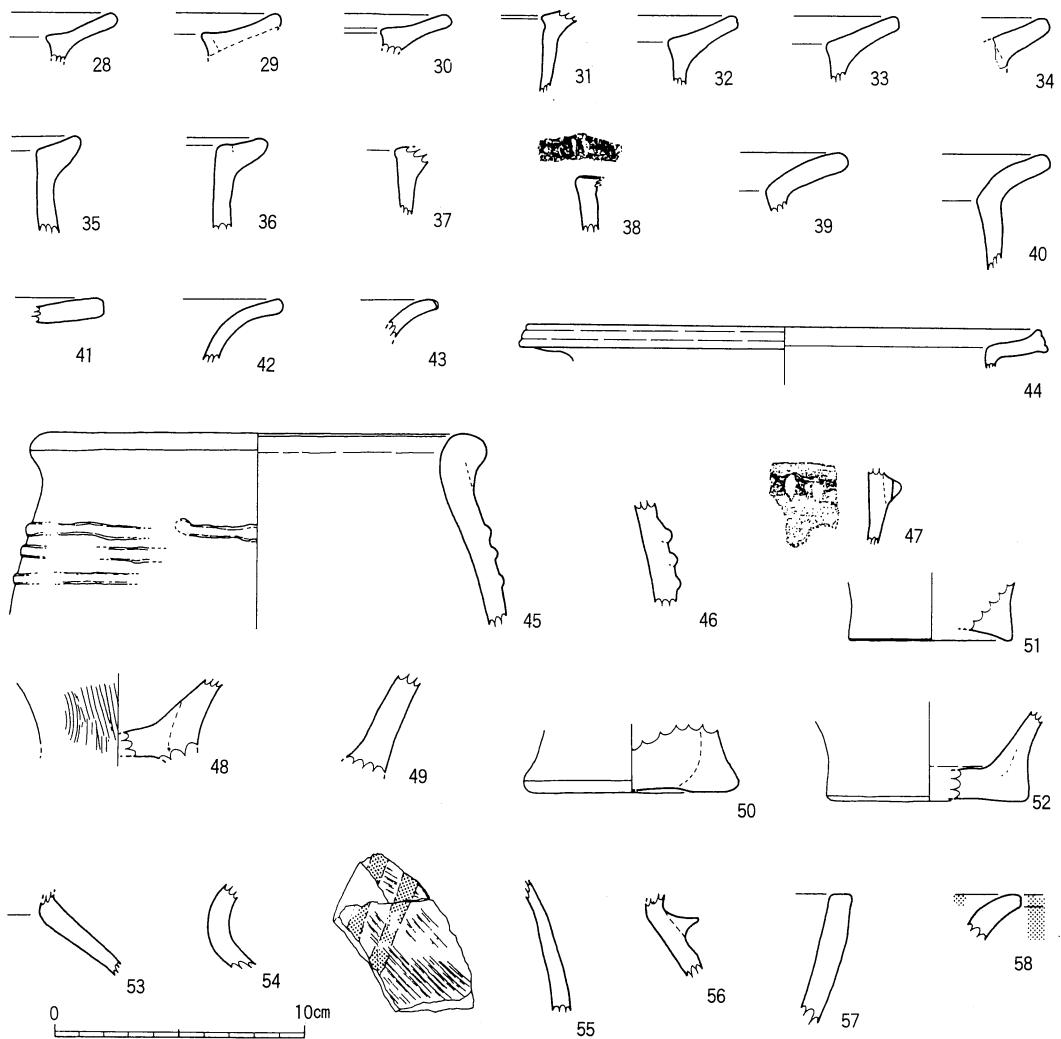
第4図 SAI 遺構実測図 (1/60)



第5図 SAI 出土土器実測図 (1/3)



第6図 SAI 出土石鏃・未製品実測図 (2/3)



第7図 包含層出土土器実測図 (1/3)

甕形土器の中ではこの類が多く出土している。口縁部付近は殆どナデ調整であるが、胴部にはハケ目も見られる。口縁部の内面が殆ど張り出さないC-1類 (5・32~33) と口縁部内面がわずかに内側へ張り出し端部から内側へ向かってやや器壁が薄くなるC-2類 (1~4・6~7・28~31) がある。1~4は同一個体である。34もこの類であろう。

D類 (13~14・39・40) …口縁部が外反し「く」字状となり、内面に稜を有する。端部は丸い。13~14は同一個体と思われるが破片が小さいため傾きは不明である。

E類 (18・45) …器壁が厚く胎土も粗い土器で、口縁部は玉縁状に丸い。胴部に3条の突帯が貼付されている。46もこの類の胴部片であろう。

F類 (44) …口縁端部に凹線文が見られるいわゆる凹線文土器である。V区の包含層

(II層) から同一個体の口縁部が2点出土している。

甕形土器底部

a類 (8~10・12・48) …脚台状の底部になると思われるもの。いずれも調整にハケ目が見られる。脚台部内面に砂等は見られない。

b類 (50)…わずかに上げ底で横に張り出すもの。分厚い底部と思われる。ナデ調整である。

c類 (51~52) …わずかに上げ底で真っすぐに立ち上がり外反するもの。11・49もこの類と思われ、調整も同じくナデである。

壺形土器

量的には少ない。口縁部が外反して開き頸部直下に刻目突帯をもつ広口の壺形土器 (20) のほか42・43も壺形土器の口縁部と思われる。胴部片では同じく頸部直下に突帯を持つもの (56) や胴部最大径のあたりに突帯を持つもの (21)、赤色顔料により彩色が施されるもの (22・23・55) などがある。

鉢形土器

57は直口する口縁部の鉢形土器と思われる破片である。

高環形土器

高環形土器はそれぞれ別個体ながら25~27・58のいずれも赤色顔料が見られ、25以外は磨研してある。

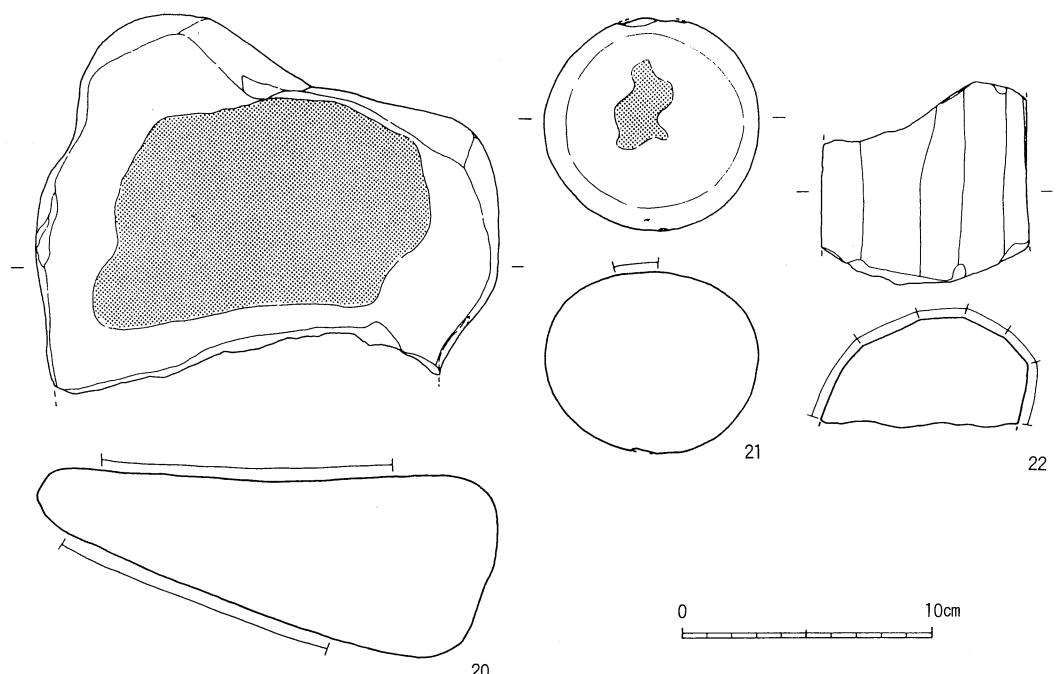
その他

赤色顔料の痕跡が残る注口部分と思われる土器が出土している (24)。

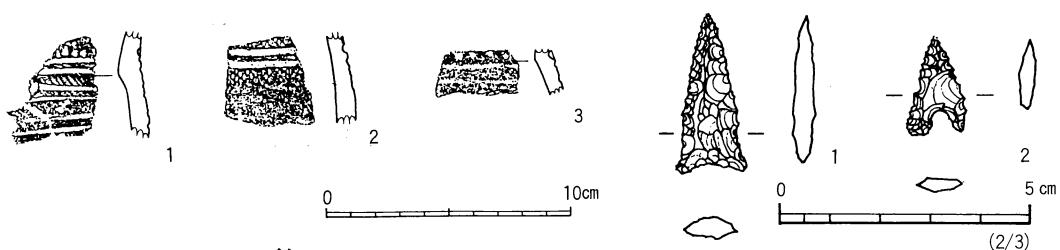
石器 (第6・8図) の出土点数は少ない。磨製石鏃及びその未製品は殆どSA1出土である。上層から下層まで出土するが、特に8~10・13~16・20は床面で出土している。基部に抉りのある磨製石鏃のうち9は中央土坑の東の縁で、8及び15~16の未製品は中央土坑の南西側で出土している。また、10・13・14は刃部が研ぎ出されていない磨製石鏃の未製品であるが、10・13が北側の突出壁の下で、14が北側のベッド状遺構の上で出土している。20の石皿もしくは砥石と思われる石器は中央土坑の真中の小ピットの南側で出土している。なお、第6図の1~9は磨製石鏃の完成品で、10~14は刃部が研ぎ出されていない未製品、15以下は石鏃の形に近い未製品かと思われる剥片である。石材はいずれもいわゆる頁岩である。

3. 繩文時代の遺物

第9図1・3はI区出土、2はIV区SA1出土のいずれも縩文時代後期後半の磨消縩文系の鉢形土器胴部片である。1は頸部に刺突列点文、胴部は撚りの小さな縩文に6条の沈線文と多分対向弧文と思われる刺突文が施される土器で、2は磨きの上に縩文と2条の沈線文が施される。3は頸部に刺突列点文が見られ、胴部は風化が著しいが2条の沈線文が見られる。打製石鏃の1はIV区出土、2は同SA1の出土である。ともにチャート製で、



第8図 石器実測図 (1/3)



第9図 縄文時代遺物実測図 (2/3)

ほかに1点IV区の南側で黒耀石製の打製石鎌が出土している。1は最大長3.2cm、最大幅0.5cm、最大厚0.5cm、重量1.4g、2は最大長1.9cm、最大幅1.2cm、最大厚0.3cm、重量0.5gを測る。

第IV章 おわりに

本地原遺跡の今回の調査は道路の路線幅という狭い面積の調査ではあったが概ね次のような点が明らかになった。

1 出土した土器は、縄文時代後期後半の西平式前後の磨消縄文土器、口縁部がやや立

ち氣味の黒髪式系と考えられる甕形土器、瀬戸内系の凹線文土器など弥生時代中期末～後期初頭頃におさまると思われる弥生土器である。

2 このうち、弥生時代のみ生活の痕跡が確認された。検出された堅穴住居跡は、間仕切り壁と考えられる内部突出壁やベッド状遺構を有する花弁状の住居跡で、この種の住居跡としてはえびの市で最も古い確認例となった。また、V区で出土した凹線文土器は内陸部での出土はまれで甕形土器という点でも貴重な出土例となった。

3 堅穴住居跡からは、磨製石鎌の一連の作業工程がこの場で行われていたことを示す石材の剥片、チップ、未製品と思われる剥片、未製品と考えられる刃部の研ぎ出されていない磨製石鎌、そして磨製石鎌の完成品、磨面のある石皿状の砥石と思われる石器などが出土している。

4 堅穴住居跡の床面には、柱の痕跡と思われる穴が4本検出された。しかし、柱穴は6本検出でき、建替え拡張が行われたと考えられる。また、最初の柱穴は貼り床と同じ混合土で埋め戻されている。柱穴は中央部に寄っているもののほぼ突出壁の延長線上に位置している。

5 周辺の地形や半月形石庖丁の出土地点などから見て弥生時代の集落の中心は今回の発掘区の東側に存在すると思われる。

弥生土器観察表

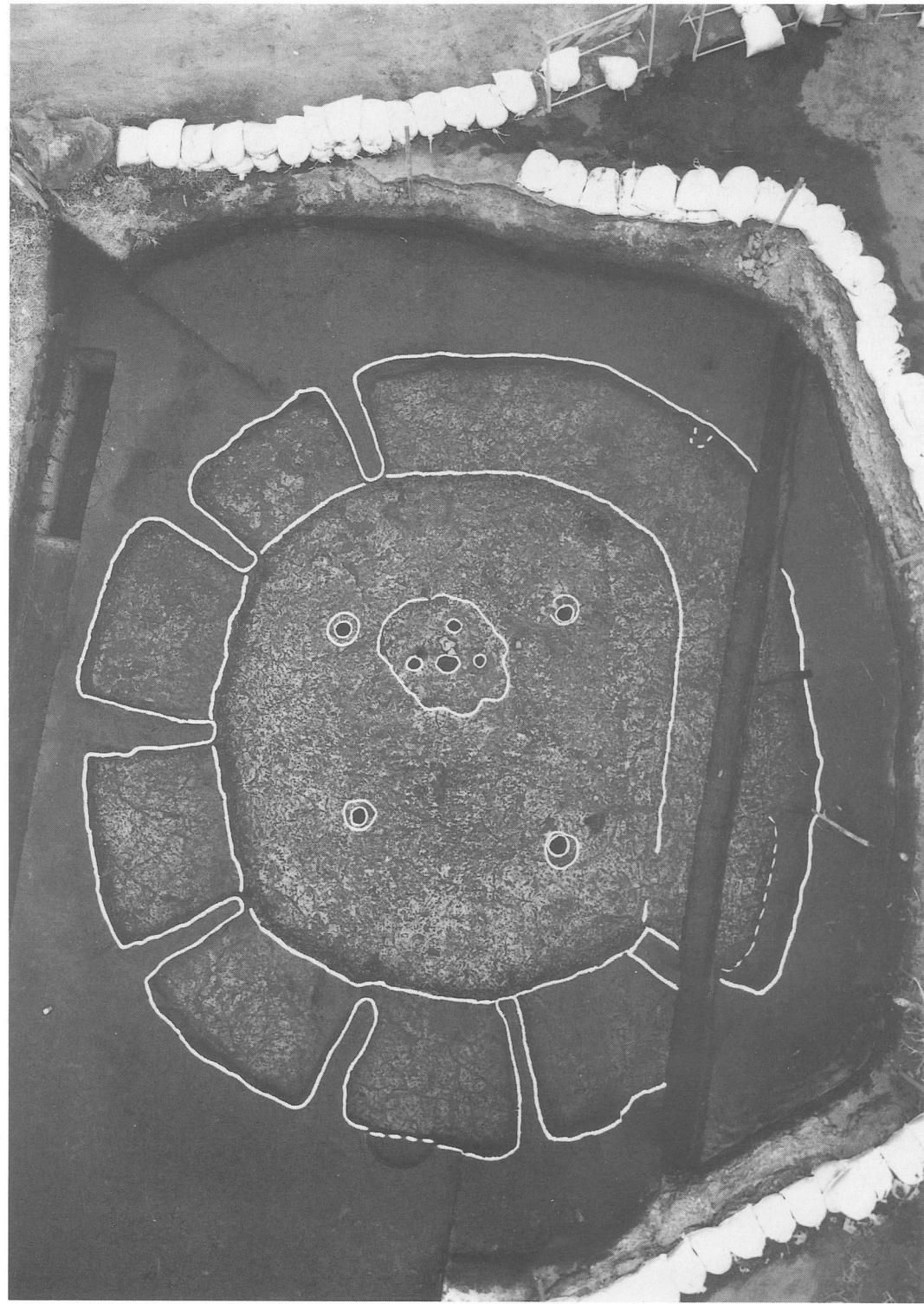
遺物番号	出土地点	器種	法量(cm)		形態・手法の特徴ほか	色調	胎土	備考
			口径	底径				
1	SA1	甕形土器	31.0 (推定)	—	口縁部～胴部。(内)ナデ、(外)斜ハケメ 口縁部内外横ナデ	(内)にぶい橙 (外)にぶい橙、灰褐	1.5mm以下の砂粒・鉱物粒	外面にスス付着
2	"	"	—	—	口縁部。(内外)横ナデ	(内)にぶい黄橙 (外)灰黄褐	1.5mm以下の砂粒・鉱物粒	1と同一個体
3	"	"	—	—	口縁部。(内外)横ナデ	(内)淡黄 (外)浅黄	1.5mm以下の砂粒・鉱物粒	外面にスス付着 1と同一個体
4	"	"	—	—	胴部。(内)ナデ、(外)横ハケメの後斜ナデ	(内)褐灰 (外)褐灰、にぶい黄橙	2mm以下の砂粒・鉱物粒	外面にスス付着 1と同一個体
5	"	"	24.5 (推定)	—	口縁部。(内外)横ナデ 内面に指頭圧痕状のくぼみ	(内)浅黄橙、にぶい橙 (外)浅・にぶい黄橙	2mm以下の砂粒・鉱物粒	
6	"	"	—	—	口縁部。(内外)横ナデ	(内)浅黄橙、黒褐 (外)淡黄、黒褐	2mm以下の砂粒・鉱物粒	外面と口縁部内面にスス付着
7	"	"	—	—	口縁部。(内外)横ナデ	(内)淡黄、灰黄褐 (外)灰黄褐	2mm以下の砂粒・鉱物粒	外面と口縁部内面にスス付着
8	"	"	—	—	底部。(底・脚内面)ナデ、(外)斜ハケメ	(内)にぶい黄橙 (外)浅黄橙	6mm以下の砂粒・鉱物粒	底部内面に炭化物
9	"	"	—	—	底部。(底・脚内面)ナデ、(外)縦ハケメ	(内)にぶい黄橙 (外)黄橙	2mm以下の砂粒・鉱物粒	底部内面に炭化物
10	"	"	—	—	底部。(内)横ナデ、(外)斜ハケメ	(内)にぶい黄橙 (外)明黄褐	2mm以下の砂粒・鉱物粒	
11	"	"	—	—	底部。(内)横ナデ、(外)縦ナデ	(内)灰黄褐 (外)明黄褐	2mm以下の砂粒・鉱物粒	底部内面に炭化物
12	"	"	— (推定)	10.4	脚台部。(内)横ナデ、(外)縦ハケメ後横ナデ	(内)にぶい黄橙 (外)にぶい黄橙	2mm以下の砂粒・鉱物粒	
13	"	"	—	—	口縁部。(内外)横ナデ	(内)にぶい橙 (外)にぶい褐	2mm以下の砂粒・鉱物粒	外面にスス付着
14	"	"	—	—	頭部～胴部。(内・外頭部)横ナデ、(外)斜ハケメ	(内)浅黄橙 (外)にぶい褐	2mm以下の砂粒・鉱物粒	外面に厚くスス付着。 13と同一個体

遺物番号	出土地点	器種	法量(cm)		形態・手法の特徴ほか	色調	胎土	備考
			口径	底径				
15	S.A1	壺形土器	-	-	胴部。(内)横ナデ、(外)突帯の上下横ナデ、下部斜ハケメ	(内)灰黄褐、明黄褐 (外)灰黄褐、明黄褐	3mm以下の砂粒・鉱物粒	刻目突帯
16	"	"	-	-	胴部。(内)横ナデ、(外)突帯の上下横ナデ、下部斜ハケメ	(内)灰黄褐、明黄褐 (外)灰黄褐、明黄褐	3mm以下の砂粒・鉱物粒	刻目突帯 15と同一個体
17	"	"	-	-	胴部。(内外)横ナデ	(内)灰黄 (外)黒、にぶい褐	2mm以下の砂粒・鉱物粒	刻目突帯
18	"	"	-	-	口縁部。(内外)横ナデ	(内)橙 (外)黒褐、にぶい橙	3mm以下の砂粒・鉱物粒 胎土は粗い	
19	"	"	-	-	口縁部。風化のため調整不明	(内)浅黄橙、黄灰 (外)浅黄橙	2mm以下の砂粒・鉱物粒	部分的に赤色顔料
20	"	壺形土器	17.4 (推定)	-	口縁部～頸部。(内外)横ナデ	(内)にぶい黄褐・黄橙 (外)灰黄褐、暗灰黄	2.5mm以下の砂粒・鉱物粒	口縁部外面にスス付着。刻目突帯
21	"	"	-	-	胴部。(内外)斜ハケメ、突帯の上下横ナデ	(内)にぶい黄橙 (外)灰黄褐	2mm以下の砂粒・鉱物粒	三角突帯。外面にスス付着
22	"	"	-	-	肩部。(内)ナデ、(外)上横ナデ、下継ハケメ後横ナデ	(内)淡黄、顔料は橙 (外)淡黄、顔料は橙	2mm以下の砂粒・鉱物粒	外面に赤色顔料。 外面は縦縞状
23	"	"	-	-	肩部付近。(内)横ナデ、(外)縦ハケメ	(内)浅黄橙 (外)淡黄、顔料は橙	2mm以下の砂粒・鉱物粒	外面に縦縞状の赤色顔料。黒っぽい
24	"	注口土器 ?	-	-	注口部か。ヘラ状のもので成形しナデか	(内)浅黄橙 (外)浅黄橙、顔料は橙	1mm以下の鉱物粒	外面に赤色顔料残る。やや赤が強い
25	"	高壺形土器	-	-	壺部。(上)ナデ	(上)にぶい黄橙、赤褐 (下)にぶい黄橙	2mm以下の砂粒・鉱物粒	上面に赤色顔料
26	"	"	-	-	脚部。(内)横ナデ、指押さえ、(外)継ヘラ磨き	(内)黒褐 (外)赤褐(顔料)	1mm以下の鉱物粒	外面に赤色顔料
27	"	"	14.0 (推定)	-	脚裾部。(内)横ナデ、(外)縦ハケメ後横ヘラ磨き	(内)褐灰、にぶい赤褐 (外)赤褐、赤黒	1mm以下の鉱物粒	外面は赤色顔料。 内面は部分的に顔料
28	IV区	壺形土器	-	-	口縁部。(内外)横ナデ	(内)淡黄 (外)淡黄	1mm以下の鉱物粒	
29	V区	"	-	-	口縁部。(内)風化、ナデか、(外)剥離	(内)黄橙 (外)一	1.5mm以下の砂粒・鉱物粒	
30	IV区	"	-	-	口縁部。(内)ナデ、(外)横ナデ	(内)淡黄 (外)淡黄	1.5mm以下の砂粒・鉱物粒	
31	"	"	-	-	口縁部付近。(内外)横ナデ、内面下部横ハケメ痕	(内)にぶい黄橙 (外)にぶい黄橙	2mm以下の砂粒・鉱物粒	外面にスス付着
32	V区	"	-	-	口縁部。(内外)横ナデ	(内)にぶい黄橙 (外)にぶい黄橙	1.5mm以下の砂粒・鉱物粒	
33	"	"	-	-	口縁部。(内外)横ナデ	(内)にぶい黄橙 (外)にぶい黄橙	2mm以下の砂粒・鉱物粒	
34	IV区	"	-	-	口縁部。(内外)風化、ナデか	(内)浅黄橙 (外)橙、浅黄橙	2mm以下の砂粒・鉱物粒	
35	V区	"	-	-	口縁部。(内外)横ナデ	(内)黄橙 (外)にぶい黄橙	1mm以下の鉱物粒	
36	IV区	"	-	-	口縁部。(内)風化、(外)横ナデ	(内)淡黄 (外)淡黄	1.5mm以下の鉱物粒	外面にスス状のもの
37	"	"	-	-	口縁部付近。(内外)横ナデ	(内)淡黄 (外)淡黄	1.5mm以下の鉱物粒	
38	V区	"	-	-	口縁部付近。(内外)横ナデ	(内)灰褐 (外)灰褐	1mm以下の鉱物粒	口縁上部に2条の短沈線文
39	III区	"	-	-	口縁部。(内外)横ナデ	(内)黒褐 (外)淡黄、黒褐	1.5mm以下の鉱物粒	口縁部内面に炭化物付着
40	V区	"	-	-	口縁部。(内外)横ナデ、外面下部ハケメ痕	(内)にぶい褐 (外)にぶい褐	2mm以下の砂粒・鉱物粒	口縁部外面にスス 内面に炭化物(?)
41	"	"	-	-	口縁部。(内外)横ナデ	(内)にぶい黄橙 (外)にぶい黄橙、赤褐	1mm以下の鉱物粒	外面の一部と内面 口唇部に赤色顔料
42	"	壺形土器	-	-	口縁部。(内外)横ナデ	(内)にぶい黄橙 (外)にぶい黄橙	1mm以下の鉱物粒	
43	"	"	-	-	口縁部。(内)ナデ、(外)横ナデ	(内)にぶい黄橙 (外)にぶい黄橙	1mm前後の砂粒・鉱物粒	口唇部に連続刻み
44	"	壺形土器	20.7 (推定)	-	口縁部。(内外)横ナデ	(内)淡黄、にぶい黄橙 (外)にぶい黄橙	1.5mm以下の鉱物粒	凹線文土器

遺物番号	出土地点	器種	法量(cm)		形態・手法の特徴ほか	色調	胎土	備考
			口径	底径				
45	V区	壺形土器	16.4 (推定)	—	口縁部。(内外)風化、ナデか	(内)暗赤褐 (外)暗赤褐、橙	3.5mm以下の砂粒・鉱物粒	口唇部にスス付着 もろい、突帯3条
46	"	"	—	—	胸部。(内)風化、ナデ、(外)横ナデ	(内)にぶい赤褐、灰褐 (外)黒、黒褐	2mm以下の砂粒・鉱物粒	外面にスス付着 突帯3条
47	"	"	—	—	胸部。(内外)ナデ、突帯横ナデ	(内)にぶい橙 (外)にぶい黄橙	2mm以下の砂粒・鉱物粒	刻目突帯
48	IV区	"	—	—	底部。(上下)ナデ、(外)縦ハケメ	(内)黒 (外)にぶい黄褐、黄橙	1.5mm以下の砂粒・鉱物粒	外面にスス付着
49	"	"	—	—	底部。(内)縦ナデ、ナデ、(外)縦・横ナデ	(内)黒、褐灰 (外)浅黄橙、褐灰	4mm以下の砂粒・鉱物粒	外面にスス付着
50	"	"	— (推定)	8.6	底部。(外)横ナデ	(内)一 (外)にぶい橙	2mm以下の砂粒・鉱物粒	やや上げ底
51	III区	"	— (推定)	6.5	底部。(下)丁寧なナデ、(外)横ナデ	(内)浅黄 (外)淡黄、橙	2.5mm以下の砂粒・鉱物粒	
52	IV区	"	— (推定)	8.0	底部。(内外)横ナデ、(下)ナデ	(内)黒褐 (外)浅黄	2mm以下の鉱物粒	外面にスス付着
53	I区	壺形土器	—	—	肩部。(内)ナデ、(外)縦ヘラ磨き	(内)浅黄橙、褐灰 (外)橙	1.5mm以下の砂粒・鉱物粒	
54	IV区	"	—	—	頸部。(内)横ナデ、(外)横ナデ、縦ハケメ	(内)褐灰 (外)灰黄褐	3mm以下の砂粒・鉱物粒	
55	"	"	—	—	胸部。(内)ナデ、(外)斜ハケメ	(内)浅黄橙 (外)浅黄橙	2mm以下の鉱物粒	外面に赤色顔料 斜めの縞模様
56	V区	"	—	—	肩部。(内)ナデ、(外)横ナデ	(内)にぶい黄橙 (外)にぶい黄橙	1.5mm以下の鉱物粒	三角突帯
57	"	鉢形土器	—	—	口縁部。(内・外上部)横ナデ、(外下部) 縦ハケメ後ナデか	(内)にぶい黄橙、灰黄褐 (外)灰黄褐、黒	1.5mm以下の鉱物粒	外面上部にスス付着
58	IV区	高形土器	—	—	口縁部。(内)横ナデ、(外)磨き	(内)黒褐 (外)浅黄橙、顔料は赤	1mm以下の鉱物粒	外面に赤色顔料 内面端部に同顔料

石器計測表

番号	種別	出土地点	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
1	磨製石鏃	S A 1	3.39	2.25	0.20	1.7	
2	"	"	(1.96)	(2.15)	0.18	1.1	欠損
3	"	"	(1.60)	1.90	0.25	1.1	"
4	"	"	(2.95)	2.10	0.25	1.8	基部"
5	"	"	(1.45)	2.20	0.20	1.1	欠損
6	"	"	2.00	1.65	0.15	0.6	
7	"	"	(1.65)	(1.55)	0.15	0.5	欠損
8	"	"	(3.40)	(1.95)	0.20	1.7	"、凹基
9	"	"	(2.50)	(1.72)	0.15	0.9	"、凹基
10	"	"	2.43	1.90	0.15	1.2	未製品刃部なし
11	"	"	(2.10)	1.80	0.19	0.9	"、欠損
12	"	"	(1.95)	(1.40)	0.20	0.6	"、"
13	"	"	(3.32)	2.35	0.20	2.6	"、"
14	"	"	3.03	2.45	0.18	2.2	未製品
15	剥片	"	3.10	2.20	0.28	2.5	石鏃未製品
16	"	"	4.60	2.90	0.40	8.0	"
17	"	"	4.40	(1.90)	0.35	4.8	"
18	"	"	4.40	2.40	0.40	4.5	
19	"	"	2.80	2.20	0.20	1.6	
20	石皿または砥石	"	(15.4)	18.6	7.60	2,500.0	両面に磨面、欠損
21	磨石	表面採集	(8.6)	8.6	7.30	734.0	欠損
22	砥石	V区	(8.15)	8.3	(4.40)	416.0	欠損



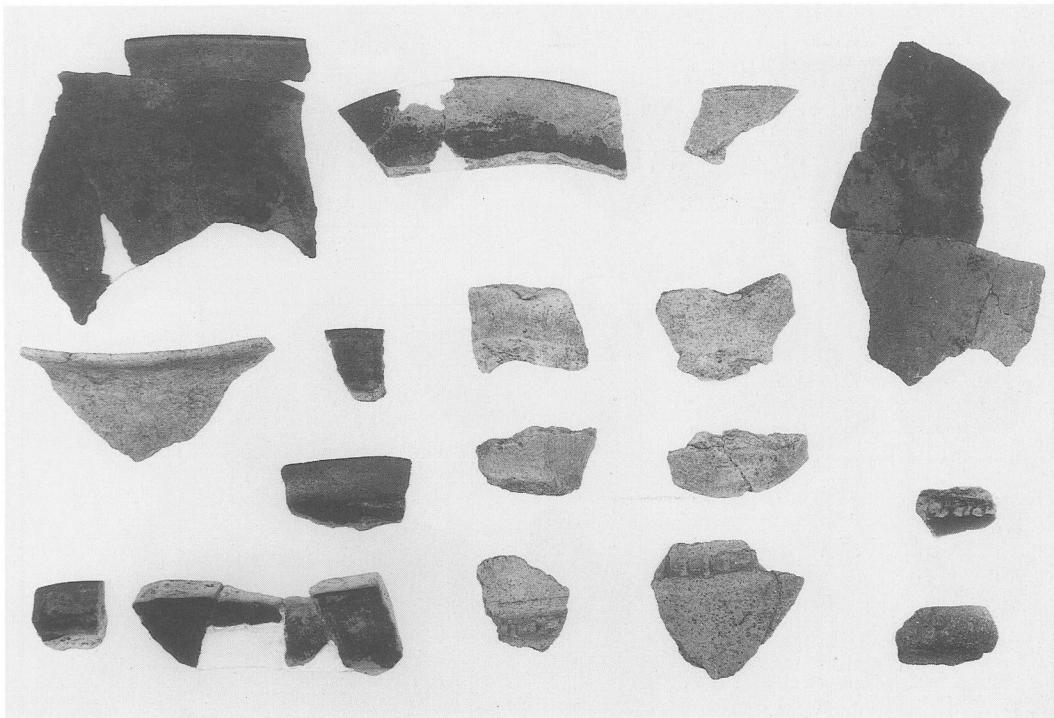
本地原遺跡 SA I 全景



本地原遺跡遠景（北から）

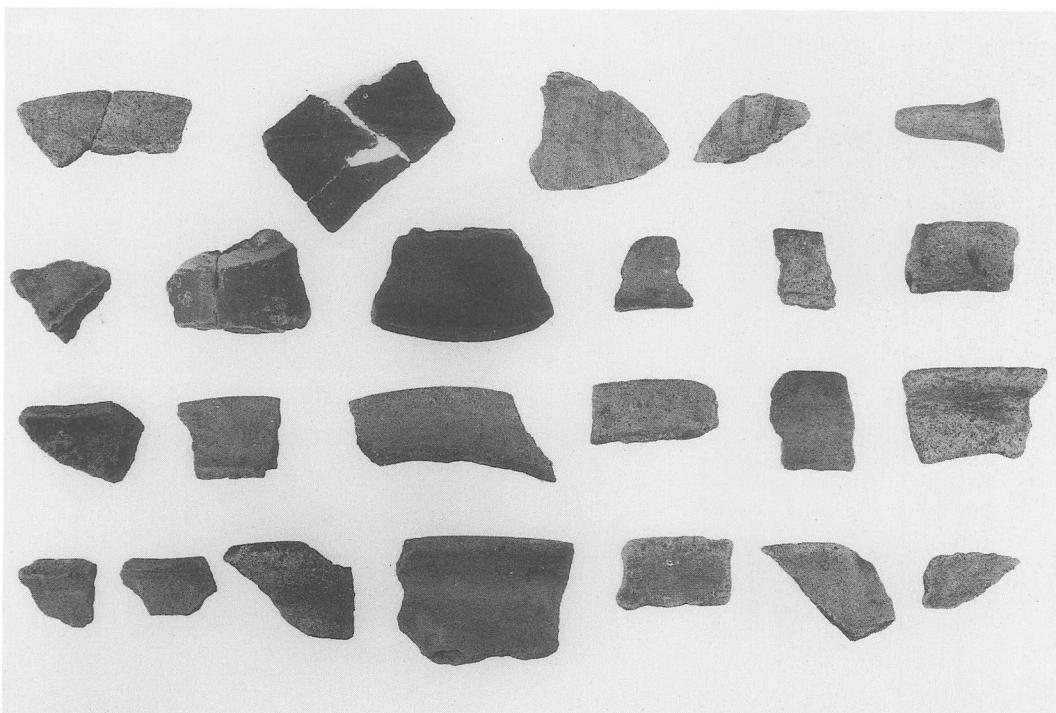


本地原遺跡遠景（西から）



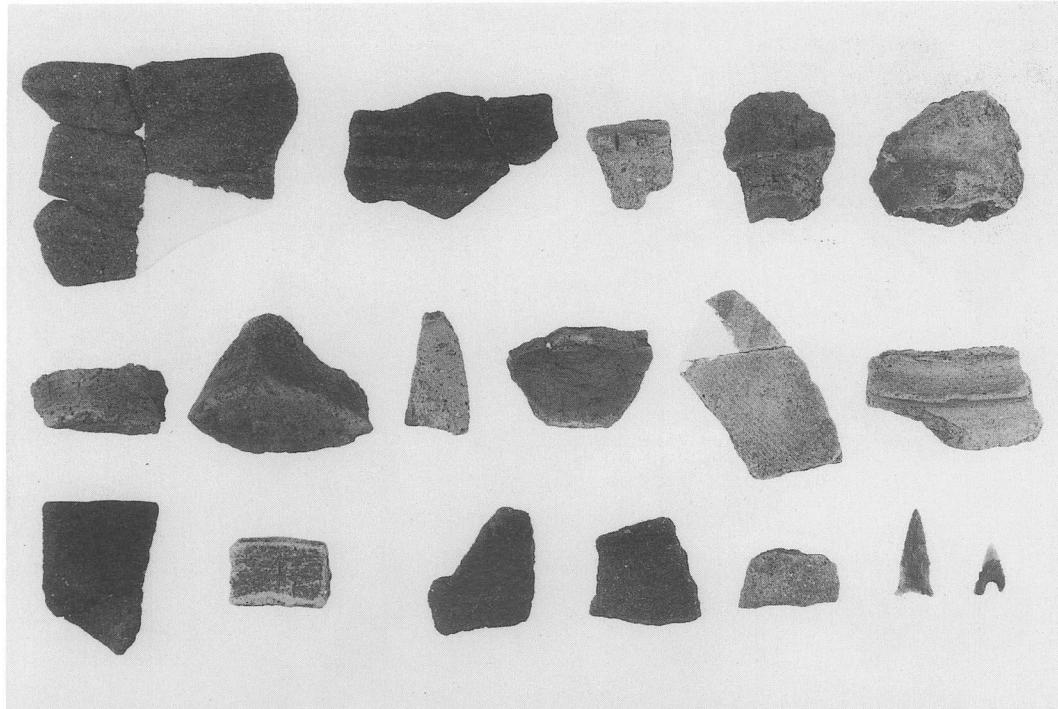
SAI出土土器

左から1~7、9~18



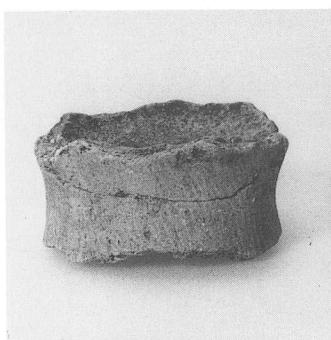
出土土器

左上から19、21~43

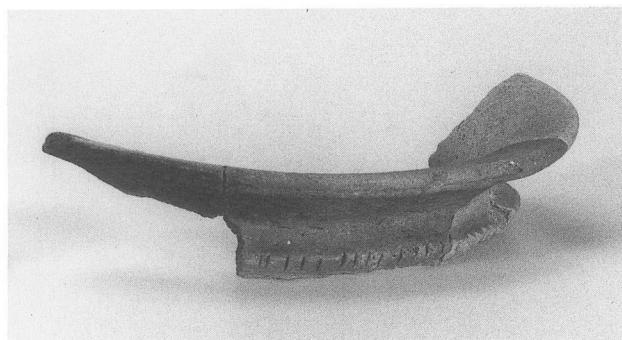


出土土器

左上から45～49、51～58
縄文土器1～3、打製石鎌1～2



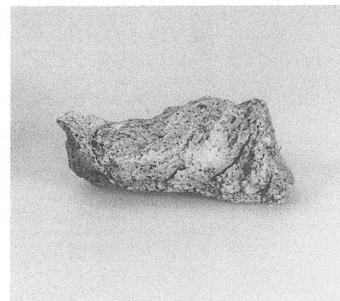
8



20

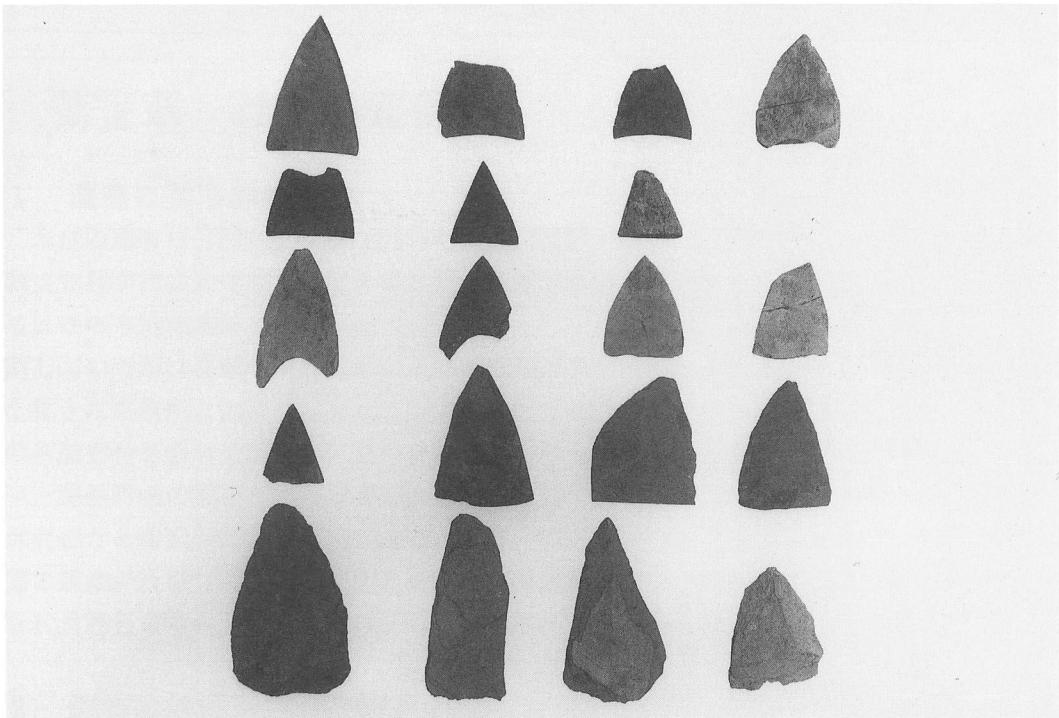


44



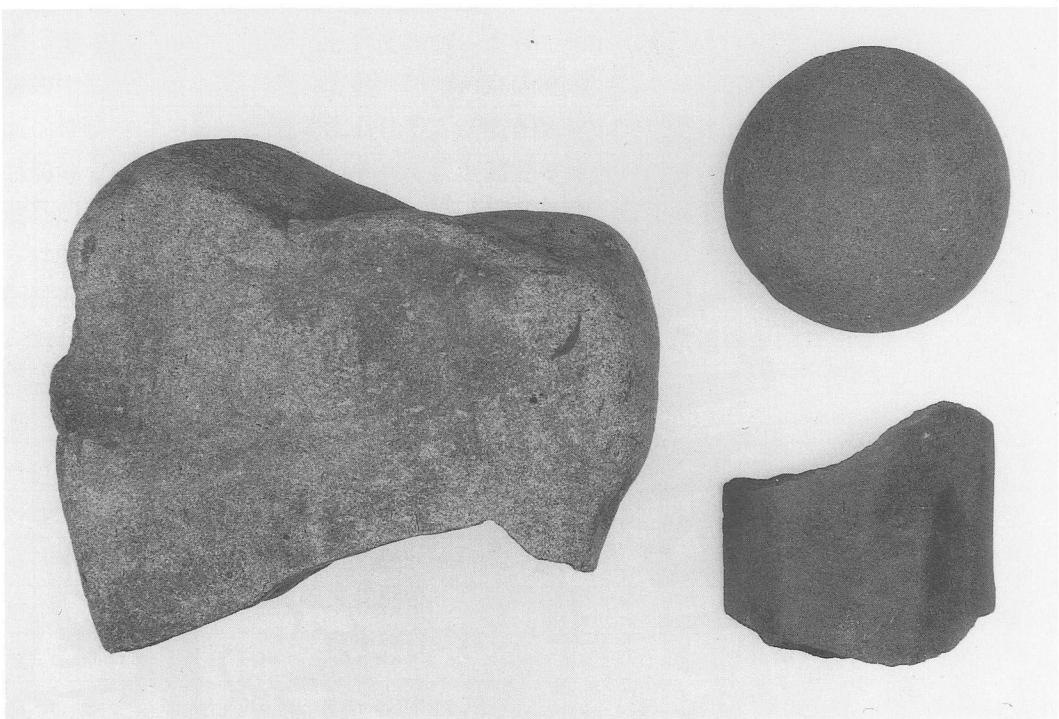
50

出土土器



出土石器

左上から 1~19



出土石器

20~22

本地原遺跡

都市計画街路事業八幡通線道路改良工

事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成6年3月

編集行
発行

宮崎県教育委員会

〒880 宮崎市橋通東1丁目9番10号

印 刷

小柳印刷株式会社

〒880 宮崎市旭1丁目6-25